

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究抄録(2022.4)令和2・3年度:

炎症性腸疾患患者における長期的な看護支援の在り方

炎症性腸疾患患者における長期的な看護支援の在り方

○原城湧太¹⁾ 久保百合香¹⁾ 西尾和音¹⁾ 櫻小路桃子¹⁾

太田 一美¹⁾ 業天洋美¹⁾ 上野伸展²⁾

1) 旭川医科大学病院 6階西ナーステーション

2) 旭川医科大学 地域医療支援および専門医育成推進講座

背景・目的

炎症性腸疾患（IBD）は根治的な治療はなく、一生涯付き合っていかなければならないため、長期的な看護支援が求められている。患者へのアンケートを通して、病棟看護師に求められる長期的な看護支援の在り方について明らかにすることを目的とする。

方法

IBDと診断された17歳以上の患者の中で、旭川医科大学病院消化器内科病棟に複数の入院経験があり、かつ最終入院が5年以内である126名を対象とした。無記名自記式アンケートを配布し、患者のライフイベントや入院中に看護師から支援を受けたこと、病気が理由で困難や苦勞を感じたこと、看護師がどのような存在であってほしいか、看護師にも主治医のように長く関わって欲しいかについて単純集計・クロス集計した。また自由記載についてはカテゴリー化した。

結果

看護師にも主治医のように長く関わりを求める患者は63%おり、入院回数が多いほど割合が増加していた。理由として『病気と向き合う“自分”を理解してくれている』『顔見知りの人がいると気軽に話しやすく、相談しやすい』といったカテゴリーが抽出された。患者が実際に困った内容は『食事』『仕事・職場』『生活習慣』の順で多かった。これに対して『仕事・職場』『経済的なこと』は支援を受けたと感じた患者は20%以下に留まった。さらに『家庭に関すること』や『生活の場の変化』といったライフイベントを経験しながらも、支援を受けたと感じた患者も20%以下だった。

考察

患者が希望する看護支援の内容は、食事や生活習慣にとどまらず、仕事や経済面・家庭的な側面など多岐に及んでいることが明らかになった。患者におこる様々なライフイベントを長期的な視点で、社会的背景にも焦点をあてて看護支援することが大事である。そのために、患者が相談しやすい環境づくりとして、医療者間で情報共有をしていくことで患者理解を深め、信頼関係の構築に繋げることが重要と考える。